

英語の多様性 — lingua franca としての英語

English Varieties — English as “Lingua Franca”

付岡 京子*

Kyoko Tsukeoka

1. 序—英語の多様性

日本の国際化に伴い、コミュニケーションの為の英語の重要性が叫ばれて久しい。英語というと、英米人にとっての母国語としての英語を思い浮かべる人が多いが、英語を母国語とする人以外にも、英語を話す人口は確実にふえてきており、現実には多種多様の英語が話されている。大別すると、前述の英米人及びカナダ人、オーストラリア人、ニュージーランド人にとっての母国語としての英語の他に、かつて植民地であった地域における第二言語、即ち公用語としての英語、更には外国語として国際コミュニケーションの為に使う国際語としての英語があげられる。移民として外国に永住するのでない限り、大部分の日本人にとっての英語は、第三の国際コミュニケーションの為に国際語としての英語、即ち外国語としての英語という事になる。

2. 英語教育の目標

これ迄の日本の英語教育が、英語の学習にかなりの時間をかけているにもかかわらず、実際には使えない英語しか学習していないとの批判

があるが、日本の英語教育の目標を考えるにあたって、国際語としての英語であるという事を念頭におく必要があろう。つまり目標を native の様に流暢に話せる様になる事におくのではなく、お互いに理解し合って、意志疎通ができる様になる事を目標にする事が、重要なのではないだろうか。いいかえれば、“lingua franca” としての英語を念頭に入れて考えれば、力を抜いて英語に取り組める様になり、使える英語が学べる様になるのではないだろうか。

日本人には概して完全癖があって、間違うと恥かしいという意識が強く、完全にできないと発言しないという事が指摘されてきた。表現手段である言葉の完全さにこだわるあまり、かえって意志疎通がおろそかになっているきらいがある。国会の質疑応答が真の意味での議論にならず、形の上だけのあらかじめ用意してきた一方的な発言に終わってしまう事が多いという事にも象徴される様に、日本人は概して、言葉による意志疎通が不得意な様に思われる。相手のいう事をしっかり理解して、それに対して言葉で十分に説明するという事に慣れていない。アメリカでかつて日本車が叩き壊されたり、焼かれたりする事が頻発したが、ドイツも同じ様にかなりの車をアメリカに輸出していたにもかかわらず、日本車に反発が集中した一因は、説明不足

にあったという説もある。「沈黙は金」等というてはいられなくなってきている。

留学生試験の折、質問されると質問がわからず、答えられない危険性があるので、きかれる前にあらかじめ用意しておいた事を一気に述べたて、難関を突破したという様な話は以前からよく耳にしたが、最近では海外に於ける学会での日本人の発表に、この傾向がみられる。最近の業績重視の風潮のなか、海外の学会で発表する日本人の数はふえてきている。その事自体は結構な事ではあるが、中には国際学会での発表の方が点数が高く、より評価されるという理由で、こぞって発表するという人も多きとき、発表そのものは、あらかじめ準備してくるので何とかこなせても、発表後の質疑応答になると、日本ではかなり高名な学者で通っている人でも、質問の意味がわからず、floorで「質問の意味がわかっていない。」とのささやきがあちこちで聞かれるのに、質問の意味を確かめる事すらせず、安易に“Yes.”と答えてしまっている場にしばしば遭遇する。日本人の口にするYesにはNoも含まれているとはよく云われる事であるが、実際には質問がよくわかっていないままに、あいまいに“Yes”と云ってしまった為に、誤解を生んでしまう事がかなりあるのも事実であろう。又外国で日本人が座長をつとめる場合、座長に推されるのは名誉な事ではあろうが、引き受ける以上は、もし発表者が質問の意味がわからなかったり、取り違えていたら、補足してfloorからの質問の意味を取り次ぐ位の事は、必要ではないだろうか。それさえせずに、唯決りきった事を云って、形だけの座長をつとめているのは疑問が残る。欧米人の場合は、学会でも発表の後の質疑応答から展開する議論に学ぶのが常識であるのに、海外で発表する日本人の場合、あまりにも発表そのもののみ価値がおかれ、その後の質疑応答が軽視されがちなのは、日本及び日本人に対する評価に、マイナスに働く危険性をはらんでいる。

外国語である以上、自分自身が外国語を、その言語を母国語としている人と同じ様に流暢に

話せる様になる事は、余程特別な状況にない限り難かしいし、又その必要性もないのではないだろうか。現にこういった流暢さを身につける事のできる人は、全学習者の5%未満だという報告もある¹⁾。その言語が話されている社会に生涯にわたって溶け込んで生活していくのでなければ、むしろ日本人としてのidentityを失う事なく、言葉に対してもあく迄外国語として現実的な目標を設定する事の方が、より望ましい国際交流が可能となるのではあるまいか。

かつてラジオのフランス語講座がはじまって間もない頃、長年にわたって講座を担当され、フランス語を立板に水を流すが如くに話されたある仏文学者が、幼少時フランスに長く生活しておられた時、日本語を忘れそうになって、御両親が慌てて日本に連れ戻されたという話を耳にした事があるが、筆者が学部学生の頃、英語で行われた国際セミナーでたまたま御一緒した時、参加者の一人が、「先生は何語で考えられますか。」と質問したところ、意外にも即座に、「勿論日本語ですよ。日本人は日本語訛の外国語の方が自然ですよ。」といわれたのが、心に残っている。つまり言葉は外国語を使っても、日本人としてのidentityを失わない方がいいという意味であろう。

3. 'lingua franca' としての英語

ところで、英語はすでに英米人のものだけではなく、英語を話す人口の経緯をたどってみても、1982年には、英語を母国語とする人と母国語でない英語の話し手の数が、26億600万対11億500万であったのが、1987年には35億対40億と逆転している²⁾。かつて英米の植民地であったアジア・アフリカ諸国、例えばナイジェリア、ケニア、南アフリカ共和国、ガーナ、バングラデッシュ、インド、パキスタン、スリランカ、フィリピン等の国々では、植民地支配が終わった後でも英語が使われ続け、民族国家の保全統合に貢献する事を通して、原地の影響を受けつゝ、公用語としての地位を確立してき

ている。中でも人口の多いインドでは、人口の10%が英語を話す、この数字だけで、英本土の全人口をしのぐ事になる³⁾。

話し言葉は、話し手と聴き手の相互作用によって成り立つ。聴き手が話し手に、話し手が聴き手という循環の中で、相互に影響しあって微妙な変化が形成される。英語を母国語とする人でも、長く外国に暮していると、帰国した時に、英語がおかしいと指摘される事があるという。又筆者自身の経験だが、アメリカにある日本政府の外郭団体の駐在事務所で秘書をしていた妹をもつアメリカ人の女性から、妹は事務所の日本人の話す英語が理解できるが、自分には通じなかったという話を聞いた事がある。日本人の話す英語を毎日きいていると、はじめはよくわからなかったり、おかしいと思っても、段々慣れてくるにつれ、逸脱した中にも法則性がみえてきて、相手の云っている事が何となくわかる様になるらしい。

どこの国の言葉であれ、唯聴いているだけで言葉が自然に覚えられる時期、通常9才前後をすぎると、正しい発音の外国語を聴いても、母国語の音になしきずして聴いてしまい、発音にも母国語の影響がでてきてしまうといわれている⁴⁾。つまり外国語の場合も、母国語の体系の中で聴いたり発音したりしている事になる。しかし一方言語体系を意識しはじめるという事は、逆に法則性がみえてくるという事でもある。

かつてラジオ講座の日本人英語担当者の英語が、さんざん叩かれた事があった時期に、ほめられていた数少ない担当者の一人である東後勝明氏も、自著「英語発音のコツ」の中で、耳から聴いてそのまま覚えられる子供とちがって、大人の場合は、氏の言葉を借りれば、文法に対する音法、即ち話し言葉のもつ音の法則性を見極め、類推力と判断力を働せながら練習に取り組む事を提唱している⁵⁾。

第二言語即ち公用語としての英語や外国語としての英語、所謂 *lingua franca* としての英語の場合は、湯川が *Kachru* の言葉を引用して *it was 'nativized.'* と述べているが⁶⁾、

土着の言語、又はその国の言語の発音の影響を受けているが故に、分り難い事が多い。*lingua franca* としての英語を理解する為には、一見混沌とみえるものの中にも、法則性を見出す事が重要な鍵となるものと思われる。その為にはそれぞれの国の歴史・文化を知る事が重要である。

前述の筆者が学部の学生の頃参加した国際セミナーは、夏の二週間、寝食を共にしながら英語で国際問題を討議するというものであった。このセミナーは日本で開催されたが、参加者の半数は外国人であった。当時国際キリスト教大学に留学していた *Rockefeller* 四世をはじめ、留学生も何人かいたが、このセミナーの為にわざわざ来日した東南アジア諸国の人々、中にはアフリカからの参加者もあって、参加者の国籍は多様であった。セミナーの始まる前に、外国からの参加者にまず日本に慣れてもらおうという主催者側の考えで、日本人の参加者が横浜の港迄出迎えに行き、翌日分担して東京を案内する事になった。筆者などはまごまごしていたもので、発音に訛があって分り難いという事で敬遠され、最後迄残っていたヴェトナムからの参加者を、まとめて案内するはめになってしまった。筆者自身の英語力が不十分な上に、相手の発音に訛があって、状況にてらしたり、身振り手振り表情から判断しようとしても、最初の内はさっぱり相手の云っている事が理解できず、といてあいまいな微笑でごまかしてばかりもいられず、“*Pardon?*”の繰り返しで、すっかり焦ってしまい、文字通り悪戦苦闘の連続で、途方に暮れてしまった。しかしヴェトナムは、かつてフランスの植民地であった事、その為フランス語の影響が出ているのではないかという事に思い至った時、そのつもりで聴いてみると、これ迄唯混沌以外の何物にも聞えなかった相手の云っている事に、糸口が見えてきた。フランス語では *h* を発音しないというごく簡単な発音上の法則を適用する事で、全体像が意味あるものとなってきたのにはびっくりした。*the* が [te]、(この場合の母音に関しては、多分綴り

の上で accent aigu のついているお茶を意味する単語 thé の連想から、〔ə〕ではなく〔e〕が使われたものと思われる。) that が〔tət〕, then が〔ten〕の様に、分かってみれば何という事はない、しかし使用頻度の高い単語が理解できず、苦勞していたわけで、簡単なものがかえって難しい事を実感した。対話者の言葉を理解する為には、話し手の属する国の文化的背景を知る事が、大きな助けになる事は云う迄もない事であろう。

4. 母国語としての英語

一方、母国語としての英語も一様ではない。イギリス英語とアメリカ英語の間には、発音だけでなく、アメリカの elevator をイギリスでは lift, subway を tube 又は underground という様に、語いにも相異のあるものがあるし、綴字でも、イギリスの centre に対しアメリカでは center, neighbour は neighbor, traveler は traveler という様に、相異がある。構文にしても、アメリカでは否定文、疑問文の場合に、have 動詞に助動詞 do をつけて使う等、相異がある。更に同じ語句を使いながら、違った事を意味する場合がある。例えば、public school は、アメリカでは税金でまかなわれる主として初等教育の為の通常共学の、所謂公立校をさすが、イギリスで public school といえは、通常 Eton や Harrow に代表される伝統ある寄宿制の中等教育の為の私立男子校をさす。又動詞句でも、wash up がアメリカでは手を洗う事を意味するのに、イギリスではお皿を洗う意味になる様に、同じ表現を使っているが、違う事を意味する場合があるので、英米人の間でも時に混乱を生じる事がある⁷⁾。

歴史的にみれば、アメリカ英語が初めて英国に入った時は、奇妙で不可解なものといふかしながら、実質的に標準イギリス英語とみなされている Received Pronunciation (略して RP)、別名 BBC English の方が、アメリカ英語より正統派で高級であると考えられていた時期もあっ

た。しかしアメリカが政治的にも経済的にも強固になるに従って、アメリカ英語の方が劣っているといった認識から、対等な英語の一種であるとの認識へと変化していき、受け入れられる様になった。現在では英語の発音のモデルとして、欧州では主として英音が、アジアや南米では主として米音が用いられている⁸⁾。ちなみに日本で出版されている英和辞典の発音の項には、通常米音が先に、次に英音という様に並記されているものが多い。しかしながら、その発音を実際に使っている人の数からいうと、現実には RP は、英語圏のごく一部でしか使われていない。それにもかかわらず、いまだ RP が、諸外国に於ける英語音声学のテキストに、英音の代表として伝統的に用いられているのは、何故であろうか。

ここでイギリス英語について簡単にふりかえてみると、英国内では書き言葉に関する限り、標準化のはじまりは9世紀、10世紀にさかのぼる事ができる。綴りも18世紀には、ほぼ固まっているし、語いや文法・構文に関しても、定着している。その反面話し言葉に関しては、地域による差が非常に大きいし、世代間の違いもある。更に Gimson が “Pronunciation was … a marker of position in society.”⁹⁾ と指摘している様に、発音はその時代の支配階級という社会的権威を映し出す鏡の役割も果している。すでにみてきた様に、RP を現在実際に使っている人口は、必ずしも多くない。Received Pronunciation (RP) の received は、もともと上流社会に受け入れられているという事を意味し、はじめは地域方言であったものが、public school で使われたり、大学教育を受けた教養あるロンドン市民が使う様になった事から、階級方言として発達し、更に放送関係で使われた事から、BBC 英語ともいわれ、実質的に標準イギリス英語として、受け入れられる様になったという経緯がある¹⁰⁾。

一方アメリカ英語の代表というと、General American (略して GA) を思い浮かべる事が多いが、厳密にいうと GA は、RP に対応する様な

標準的なアメリカ英語の発音とはいえない。放送にもGAの代りに、文化的優越性を誇る東部方言が使われる事が多いし、首都である Washington D.C.の発音も、アメリカ英語の発音を代表しているわけではなく、アメリカ英語に関しては、イギリス英語のRPに相当する様な標準発音は存在しない。イギリス英語にくらべると、アメリカ英語は領土的に広大な地域にわたっているにもかかわらず、差異が少ないといわれている。反面アメリカ人は、その国名が各州の強い独立性を象徴している様に、発音に関しても、地域色を強く残そうとする意識が強く、国全体としての標準発音設定には抵抗が強い。

従来アメリカ英語の代表的な方言として、New England 地方を中心とする東部方言、Virginia 州から南西部一帯、Texas 州東部迄の南部方言、それに General American (GA) と呼ばれている New York 西部、Pennsylvania 州から太平洋岸に至る広い地域にわたって話される中西部方言の三つがあげられてきた。しかし1930年になって、アメリカ全土にわたる方言地図の作成が計画され、1949年に出版された *A Word Geography of the Eastern United States* では、東部大西洋岸の英語は、北部方言、中部方言、南部方言の三つに大別されている¹¹⁾。アメリカ東部はイギリス本土からの移民による植民地発生の地であり、これ等三つの方言は、移民の出身地との関係が深い。即ち北部方言と南部方言はイングランド南部の英語と類似性があり、中部方言はイングランド北部やスコットランドの英語と類似性がある。その後西への開拓が進むにつれ、三つの方言が混ざりあい、境界のはっきりしなくなっていく。西部への移住者の大多数を占めたのが、中部移民であった為、中西部方言は中部方言の流れを汲み、イングランド北部やスコットランドの英語と類似性を持つ広い地域にわたって均質な英語として、発展していった。この地域に Inland Northern, North Midland 及び South Midland の一部を含むアメリカ全土の約4分の3にわた

る地域で話されているのが所謂GAで、話す人口もアメリカ全人口の3分の2を占めるといわれている。それにもかかわらず前述の様に、GAはアメリカに於ける唯一の標準発音とはみなされていない。

その理由として、竹林は Baugh and Cable: *A History of the English Language* 第3版を参考に、次の様に説明している。即ち、一つにはGAが方言地図作成以前にすでに漠然と設定されていたという事情から、アメリカの方言学者達がGAという名称を使っていないという事、更にアメリカでは地域の独立性が強く、それぞれの地域がその地方の標準発音を持ち、それを維持しようとする傾向が強いので、一つの方言が国の唯一の標準発音となる事に対しては反発が強い事。更に General American という名称そのものが、いかにもアメリカ英語を代表するかの如き印象を与える事も、他の地域の人々からの強い反発を招く一因を作ってきたと説明している¹²⁾。

かつて John F. Kennedy が大統領に就任した時、Boston 地方独特の [r] の発音が話題になった事があるが、筆者がかつて留学していた中西部の Kansas 州 Wichita に、Boston から移ってきた一人の言語治療士がいた。彼女は生まれつきのアメリカ人であるにもかかわらず、Wichita で言語治療士としての仕事をはじめるとあって、彼女自身言語矯正を受けていた。つまりその地で言語治療士として仕事を為すには、その地方の方言をまず身につける必要があるという事で、筆者等の様な外国人なら、言語訓練を受ける必要があるというのうなずけるが、Boston でなら何等問題のないアメリカ英語を母国語とするアメリカ人が、何故矯正を受けなければならないのか、筆者等ははじめ不思議に思ったものだった。その土地で教育を受けようとする子供達に接する言語治療士としての仕事には、その地域の発音に習熟する事が不可欠という考え方にたっていたものと思われる。特にアメリカの様に、それぞれの地域がその地域の標準発音を持つ社会にあっては、そ

それぞれの社会で受け入れられている話し方が、特に仕事の上では求められているという事であろう。

5. 意志疎通の為の相互作用

話し言葉には、通常聴き手という相手が存在する。同じ話し手でも、聴き手によって話し方が変わってくる。数年前参加したある国際学会で親しくなったニュージーランドからの参加者と、英語を母国語としない東ヨーロッパからの参加者を交えて、人種問題や当時の東欧の共産主義について話をしていた事があった。彼女の英語が非常によくわかるので、筆者の英語もまだ捨てたものでもないのかしら等と思いはじめたところ、「外国人と話す時は、易しい単語を選んで話している。」と云われ、道理で筆者の拙い英語力でもよくわかるのだと、合点がいったものだった。一方同じ学会の参加者で、かつて筆者が助手として滞在した事のあるアイオワで耳鼻科医をしているというアメリカ人夫妻から、「まさか一人で食べるのではないでしょうね。」と夕食に誘われ、オーストラリアからの参加者も一緒に、数人でレストランでテーブルを囲んだ折には、筆者を除き、すべて英語を母国語とする人達ばかりであったが、最初に空港で荷物が出てこなかった話をごく普通に話してしまったのが災して、皆加減しないでしゃべりはじめ、緊張している間はともかく、お腹がくちくなって眠くなってくると、ともすると意味のない音の流れに聞こえてしまい、何年振りかで海外に出た身には、会話についていくのが大変だった経験がある。留学中にも、アメリカ人の学生を含めて学生がわからないとみると、わざと早口でまくしたてた先生も中にはあって、苦勞した事もあったが、普通はわからないとみれば、説明したり、別の言い方で云ったりと、聴き手に合わせて話すので、わからないのにわかる様なふりをして必死になるより、むしろ自分の現状や立場をはっきり相手に知らせる努力をした方が、相互理解が深まり、意志疎通がスムーズに

行われるのではないかと思う。言葉そのものが目的なのではなく、言葉は意志疎通をはかる為の手段なのだを割り切って、英米人の母国語を借り物として使っているのではなく、日本人として国際語としての英語を使っているのだという認識を持つ事が、英語に対して余り構えずに学べる様になるきっかけになるのではないかと考える。

一方、敬語等は、相手によって話し方が変わる典型的な例であろう。ドイツ語、フランス語、スペイン語等には、親しさの度合いによって、二人称の代名詞に使いわけがあるが、英語はすべてyouですませる事もあり、特に英語には敬語的表現がない様に考えているむきもあるが、英語にも婉曲的な表現等、丁寧な言い方は存在するし、対話者の間柄によって言葉は変わってくる。

呼びかけにしても、これ迄日本人はともすると、呼び捨てにされると侮辱された様に思う事が多かった。最近の若い人は、日本人同志でも呼び捨てにして、むしろ親しみを感じている様だが、年配者はやはりかなり抵抗を感じる様である。アメリカではある程度親しくなると、first name で呼び合う。むしろいつ迄も Mr.~, Mrs.~ と呼んでいると、よそよそしく感じる様だ。ある日本政府の外郭団体の在米事務所長をしておられた方が、アメリカ人が親しみをこめて Saburo と first name で呼びかけたのに激怒され、「自分を三郎等と呼ぶとは何事か。」と云われたという話を耳にした事がある。筆者等も英語で話している場合は first name で呼びかけられても、さほど不自然に感じないが、自分からは仲々相手を first name で呼べなくて、アメリカに住んでいた頃息子が通っていた幼稚園で親しくなった近所に住むある婦人に、「自分もとはイギリス人なので、貴女の気持ちはわかるけれど、これだけ親しくなったのだから、もう Mrs.Courtney ではなく、Breda と呼んでほしい。」といわれた事があった。

かつて女性解放運動がさかんだった頃、Mrs., Miss の区別が女性にだけあるのは差別である

との考え方にたつて、両方に使える Ms. が使われる様になったが、最近では、手紙の宛名にも、Mr., Ms. 等一際つけない場合さえ出てきている。子供が full name で呼ばれると、逆に叱られるのかと思ってびくっとする事があるといわれるが、丁寧で正式な表現は、それなりに心理的な impact を与える。手紙の complimentary close にしても、目上の人に使う Sincerely yours を、丁寧にすることにした事はないからと、親しい人に使ったら、かえってよそよそしい感じを与えてしまい、感情を害してしまう事がある様に、言葉の選択は相手との関係によって自ずと規制され、丁寧な表現をすれば必ずしもいいというわけではない。相手との人間関係、又同じ人とでも時と場所によって変わるので、それぞれの場でふさわしい言い方が求められる。相手の立場に対する配慮があれば、相互理解はより深まるし、それなしには、それぞれの国民の identity を尊重した国際語としての英語を通しての相互理解は難しい。

しかしこの事は、相手にとってわかりにくい和製英語 Japanese English でかまわないという事ではない。英語を母国語とする人の様に話す事を目標にする必要はないが、イギリス英語にしる、アメリカ英語にしる、英米人の標準発音をモデルに、英語が stress-timed language¹³⁾であるという事を念頭に、英語の発音の特徴を把握し、リズムのある話し方を体得する事が、相互理解をより促進する事につながるものと考え、つまり相手にわかってもらえる話し方をするという事が必要で、その為には、それぞれの言語独特のリズムを体得する事が求められる。

6. 話し言葉のリズム

言葉はリズムがないと極めて理解しにくい。この事を筆者自身、昨夏チェコ人夫妻と過ごした一週間で、嫌という程味わった。飛行場からかけた電話口で、強勢の位置の正しくおかれていないリズムのない極端に速度の遅い英語を耳

にした時は、これから先どうやって意志疎通をはかったものかと、途方にくれたものだった。三年振りの再会で、次から次へと夜遅く迄話かけてくれるが、お互いにとって外国語である英語が唯一の共通語で、意味を推測するのにくたくたになってしまった。数日後、御主人の友人でアメリカ留学から帰ったばかりという画家に街で偶然出合って、紹介を受けた時には、そのリズムのあるわかり易い英語にほっとして、何日振りかで肩の力が抜けたのを、今でも覚えている。普通は早口でまくしたてられると、わかりにくいという事が多いが、極端に速度を落とすとリズムがとれなくなり、かえってわかりにくい。ラジオの語学講座等で、native の講師にゆっくり読む様に頼むと嫌がると、かつて native と組んでラジオ講座を担当された方から伺った事があるが、言葉にとってリズムが如何に重要かを物語っている。

話し言葉に関しては、構文が多少文法的に間違っていようが、又個々の単語の発音が多少おかしくても、文強勢が正しくおかれ、文強勢と次の文強勢の間の時間的間隔がほぼ等しくなる様なリズムと、正しい抑揚で話されると、聴き手の側も推測しやすくなり、理解度が高まる。話し言葉ではリズムの関係で、時には単語独特の強勢の位置すら変る事もあり得る程で、リズムが何より優先される。弱く発音される所は、物理的に聞えてこない事があって、聴き手は常にその聞えてこない部分を推測して補って聴いているわけで、この弱い部分を間違えて発音していたとしても、問題はない。機能語等は、書き言葉の場合は間違えると目立つが、話し言葉では間違ってもほとんど問題にならないのは、この為である。この観点からも、話し言葉にあっては、極端な正確さにこだわる事は意味がない。間違えたら恥ずかしい等と思わずに、相互理解促進の為に、共通の外国語、即ち国際語としての英語を、リズムにのって臆せず積極的に話す事を心がけたい。

注

- 1) Emiko Yukawa & Christine Yatsushiro, *Developing Intercultural Communication Skills*, 金星堂, 1988, p.52.
- 2) Ibid., p.56.
- 3) Ibid., pp.55~56.
- 4) Wilder Penfield & Lamar Roberts, *Speech and Brain Mechanism*, Princeton University Press, 1959, p.244.
- 5) 東後勝明, 「英語発音のコツ」, 金星堂, 1977, pp. 2~4
- 6) Yukawa & Yatsushiro, op.cit., p.56.
- 7) Richard Musman, *UK and USA*, Macmillan Language House, 1986, p.2.
- 8) A.C.Gimson, *An Introduction to the Pronunciation of English*, 3rd ed., Edward Arnold, 1980, p.92.
- 9) Ibid., p.89.
- 10) 竹林滋, 「英語音声学入門」, 大修館書店, 1982, pp. 4~5.
- 11) Han Kurath, *A Word Geography of the Eastern United States*, University of Michigan Press, 1949, pp.11~47.
- 12) 竹林, op.cit., p. 8.
- 13) Gimson, op.cit., p.305.

Gimson は “The stress-timed rhythm of the English utterance…with the related obscuration of weak syllables is the prime distinguishing feature of the language’s pronunciation, with no exact parallel in any other language.” と述べている。